不変資本と可変資本について

中　尾　訓　生

はじめに

本稿の課題はマルクスに固有のものである「不変資本」と「可変資本」の両範疇の解釈を通して経済学批判（物象化）の論理を明確にするところにある。

そこで，まずこれら両範疇が背負わされている論理課題を述べることにする。

「6章，不変資本と可変資本」は「5章，労働過程と価値増殖過程」に続いて展開されているが，私は前稿｛「貨幣の資本への転化」（『山口経済学雑誌』23の5・6号）｝において「労働過程と価値増殖過程」によってマルクスは国民経済学批判の基礎としていた人間観①を論理的脈絡のなかに基礎づけ，経済学批判を内在化したと解釈した。

すなわち，物象化された意識②と社会の物的代謝の一致が，いいかえると労働

---

① 人間観については，「マルクスにおける労働概念の展開」（『三田学会雑誌』67の11号，野池洋行）を参照。野池氏は次のように述べられておられる。「総じてマルクスの立場が，独自な領域としての意識や「理念的なるもの」の存在や，その能動性を否定するものと考えるのはあやまりである。それらはまさに人間の労働を特徴づける人間固有の属性である。」

② 「商品形態は，人間にたいして彼ら自身の労働の社会的性格を労働生産物自身の対象的性格として，これらの物の社会的自然属性として反映するということ，したがってまた，総労働にたいする生産者の社会的関係をも，彼らのほかに存する対象の社会的関係として反映するということである。」（『資本論』Ⅰ・95頁，向坂訳）

の特質が説かれたと解釈した。私は物的代謝の解明がマルクスにとっては物象化された意識の解明であるということをこれまで強調してきたが,「不変資本」と「可変資本」こそ，かかる意味での物的代謝を解明するため基礎的範疇である。

マルクスによると人間の本質的規定は労働である。労働は二つの面から，すなわち抽象労働と具体的労働から考察されるべきであるとした。そして商品には，これらの労働が表示され，その生産過程は具体的労働と抽象的労働の二つの過程，すなわち労働過程と価値増殖過程とであるとした。(『資本論』Ⅰ・256頁，向坂訳)

その際，労働過程は，あらゆる社会形態から独立したものとして，まずとらえられなければならないとマルクスは述べている。(同上・Ⅰ・231頁)

このことは，どのように解釈すればよいのであろうか。

私が問題としていることは，あらゆる社会形態に共通している規定から説明する仕方と，対象の歴史的特徴（物象化）との関係である。

前稿で述べているところであるが，簡単に本稿の関わりから解釈の枠組を提示する。

マルクスは，すでに商品論で対象の歴史的特徴は設定しているが，それの維持，再生の根拠は「労働過程と価値増殖過程」であたえるのである。そのとき，対象とした社会の富である商品に表示された具体的労働が貨幣の設定の際に果たしたと，ちょうど同じ役割を労働過程は果たすのである。

そして，以前から強調されていた人間観＝労働そのものは，労働の対象的諸条件と不可分であるということから経済学の領域に取り込まれてくるのである。すなわち「個人のがわからする自然の領有」―，それは具体的労働によって示されるのであるが，―はその対象的諸条件によって測定される。労働手段は人間労働力の発達の測度器である。

しかしながら，対象とした社会では「個人のがわからする自然の領有」は転倒したかたちであたえられる。そして，しかもその故に，この社会は維持，

再生するということを彼は述べている。そして，彼は社会の維持，再生という理論対象の標的を労働とその対象的諸条件（労働手段，原材料）の再生産として絞るのである

注意しなければならないのは，ここに存在しているわずかばかりの理論対象の移行である。この移行を意識していないと彼が攻撃してやまなかった「俗流経済学」を彼の名において論ずるという悲喜劇を演ずることになるだろう。

このわずかばかりの移行が多くの読者に意識されない若干の理由は著者の展開にも求められる。それは，あらゆる社会形態から独立した規定の叙述――労働過程――と対象とした社会に関する叙述――価値増殖過程――との結びつきが詳述されていない，ということである。

労働とその対象物諸条件について述べたあと，マルクスは「われわれは，われわれの生成中の資本家のもとに帰ろう」（同上Ⅰ．240頁）として「価値増殖過程」に入ってゆくのであるが，ここは，すでに資本家と労働者の世界である。読者はここで立止まりこの世界が，どのようにして措定されたかに注意を払わなければならない。そうしなければ，マルクスが苦心した対象の歴史的特徴づけを読者は読者自身の資本主義にたいする想念―読者自身はマルクスのものであると固く信じているのであるが―で置き換えることによって対象とした社会になんの苦労もなく入り込んでしまうだろう。例えば，資本主義社会の基本規定を「生産手段の私的所有」とする読者は「価値増殖過程」の世界にすぐに入ることができるであろう。なぜなら，マルクスは，資本家と労働者を前提にして，ここの展開をはじめているのだから当然，生産手段は私的に所有されていることになっている。

しかし，資本家は具体的歴史叙述――「いわゆる本源的蓄積」――であたえられるとともに，G―W―Gの意識的な担い手としてあたえられるのである。

「労働過程と価値増殖過程」は，この貨幣の無窮の運動を総体的に把握する役割をあたえられているのだから，事柄は，この読者にとって逆でなければならない。すなわち「労働過程と価値増殖」で読者は資本主義社会の基本規

定を把握しなければならない。

「不変資本」と「可変資本」に課せられている役割は，これらが労働とその対象的諸条件の再生産を説明するとともに，対象の歴史的特徴の再生産をも説明しなければならないというところにある。

1

「不変資本と可変資本」の冒頭，マルクスは労働とその対象的諸条件の再生産を「価値増殖過程」で説明する場合に生じてくる一つの問題点から労働の二重の性格に言及している。

その問題点とは生産手段と原材料を表現する価値と労働が生みだす価値はどの時点においても所与とされなければならないという再生産把握から引き出された問題である。

現にある労働とその対象的諸条件を過去からの連続として設定することが要点である。

---

③　私は『経済学批判要綱』(高木・訳) と『資本論』の論理枠組――『要綱』が『資本論』に至る研究ノートであるとしても，両者を隔てるものは，両者の論理枠組である。したがって，『資本論』，の叙述と『要綱』のそれに類似した叙述の直接的比較によって論理成熟度を測定することは，あまり意味がない。――には，「物象化」の視角からみると決定的な差異があると解釈している。

『要綱』の論理枠組は「一般序説」においてみることができる。

「われわれは，つねに資本の二つの要素，すなわち生きた労働日の二つの部分――その一つは賃金を，他は利潤を，すなわち一つは必要労働，他は剰余労働を表わす――についてだけ述べた。では，資本の他の二つの部分，すなわち労働材料と労働用具とに実現されている部分は，どこにのこるか？　単純な生産過程について言えば，労働は労働を容易ならしめる用具の存在と，労働が表示され，それを形づくっていく，そのための材料の存在とを想定している。この形態がそれらのものに使用価値をあたえる。この使用価値は，交換でそれが対象化された労働をふくんでいるそのかぎりで交換価値となる。だが資本の構成部分として，それらのものは労働が補塡しなければならない価値であるか？」(II．277 頁)

再生産の問題をこのように提起できたのは，「どの時代をもつらぬいて存在する人間と自然の存在様式」(『コメンタール「経済学批判要綱」』(上) 69 頁，講座マルクス経済学，6) を背景にしていたからである。

それは，「生産とは……個人のがわからする自然の領有 (Aneignung)」(I．9 頁) とい

この再生産把握の基礎にあたるのは，労働それ自体（人間）への考察はその対象的諸条件を不可分とするという認識である。

この問題の解釈をマルクスは「価値を付加しながら価値を保存するということは活動しつつある労働力の，すなわち，生きた労働の一つの天資である」（Ⅰ．268頁）という規定㈠に求めた。③　すなわち，価値を付加するという性質と保存・移転するという性質，この二つの性質を労働行為のなかから読みとったわけである。

うことであるが，これは，労働とその対象的諸条件は，常にセットであるということを含んでいる。

だから，この問題はその出発点（背景）をケネーやスミスらが抱いていた問題の背景とは異った視角で彼においては提起されている。

労働の対象的諸条件を連続性のなかで位置づけるということ，すなわち，「資本の素材の内部で進行」（II．224頁）するものとして位置づけることが提起されているのである。

彼は次のように解答する。

「もとの価値の維持は，彼にもって新たな価値を付加するもの以外に，絶対になにものをも要費しない。彼にとってそれは，たんに材料であり，またどんなに形態を変えようとも，依然として材料であって，したがって彼の労働とは独立するものである。この現存するものが材料であり，あくまで材料だけだということは，それがたんに他の形態をとるにすぎず，それ自体すでに労働時間をふくんでいるからであるが，このことは資本の問題であって彼の問題ではない。つまり，それはやはり彼の労働とは独立しているのであって，労働ののちにも労働のまえのままの姿で存続している。このいわゆる再生産は，彼にはすこしも労働日をついやさせない。

むしろそれは彼の労働時間の条件である。というのは，それは現存の素材を彼の労働の材料として措定し，彼にたいして材料として関係すること以外のなにものでもないからである。……彼は，単純に新たな労働時間の添加を通じて，もとの労働時間を補塡するのであって，それによってもとの労働時間はあとまで生産物のなかに維持されており，新たな生産物の要素となるのである。」（II．280頁）

生産一般に関する規定から材料と用具は労働の対象的諸条件であることがまず強調される。そして，価値の維持は，価値を付加することによってはたされるとしている。生産一般（＝単純な生産過程）の規程から，なんとか，その相違点（歴史的特徴＝価値増殖過程）を摘出しようと彼は努力している。すなわち，使用価値の維持、あるいは先行する労働の質の維持は「経済的にみれば」（II．284頁）対象化された労働の維持として現われるというように生産一般の規定を別様の表現で示す努力をしている。

しかしながら，生産一般の規定それ自体が，歴史的に規定されなければ，どれだけ論じても「単純な生産過程」からすればとか，「価値増殖過程」からすれば，という二元的な展開以上の発展はないであろう。

『要綱』と『資本論』の叙述の直接比較をすると，本稿が引用している規定㈠は，前に引用している（II．280頁）部分と同じように『要綱』の次の叙述と類似している。「そ

かくして，労働の対象的諸条件は価値増殖過程では保存・移転された価値としてあたえられ，労働は現にある労働（＝労働者の再生産に要する価値）を上回るものとしてあたえられる。

マルクスは，自己の論理枠組の範囲でこの解決方法によって巧みに年々の価値生産物（＝V＋M）と生産物価値（＝$\dot{C}$＋V＋M）（$\dot{C}$‥生産物に移転された生産手段の価値，V‥労働力の価値，M‥剰余価値，）を同一視するという誤りをただすことができ，物的代謝＝素材変換を説明する基礎をあたえることができた。

れがすでに対象化された労働量に新たな労働量を付加することによって，同時に対象化された労働を対象化された労働としてのその質において維持するという，生きた労働のもつ特有な質は支払いを受けないし，また労働者にとってもなにも要費しない。それは労働力能の自然的本性だからである。」（II．288頁）。この直接的比較から共通性を指摘するだけなら，本稿で引用している規定(二)の必要性はでてこないということが了解されるだろう。スミスのV＋Mのドグマの批判を可能にする基礎は，規定(一)であたえられている。しかし，マルクスは，スミスは「労働そのものの二重的性格を，すなわち，労働力の支出として価値を作り出すかぎりでの労働と，具体的有用労働としての使用対象を作り出すかぎりでの労働とのそれを区別していない。」（『資本論』II．447頁）から誤りに陥ったと述べている。『資本論』段階のマルクスにとって(一)の規定は，(二)の規定であり，(二)の規定から区別された(一)の規定は存在しないのである。すでに述べたように，「価値増殖過程」の世界における労働とその対象的諸条件の再生産は，規定(一)で説明できた。

『要綱』と『資本論』のこの点における差異は，「価値増殖過程」の世界が，前者ではまづ措定されていないという点である。規定(二)の労働の二重性によって『資本論』で「価値増殖過程」の世界が措定されたということを想起しつつ，『要綱』の次の一文を読むことにしよう。「生きた労働は，新たな労働量をつけくわえるが，しかしそれがすでに対象化された労働量を維持するのは，この量的付加によってではなく，生きた労働としてのそれの質によってであり，すなわち過去の労働の存在形態である諸使用価値にたいして，それが労働として関係することによってである。」（II．288頁）。ここで述べられている「生きた労働の質」とは，生産一般の規定から引きだされたものである。生産一般の規定が歴史的に規定されないかぎり，労働の対象的諸条件の再生産はやはり歴史的規定を受けることにはならないのである。

労働の対象的諸条件の再生産に言及するとともに，対象とした現実社会の物的代謝＝素材変換にも深い分析がなされている。

すなわち，再生産表式の「原型」と呼ばれる図表を残している（II．375頁）。しかし，『資本論』のそれと比較して単なる技術的な数式上の未成熟としてのみ，この図表に関連する研究を取りあげるならば，彼が苦闘していた核心を見失うことになるだろう。

図表に関連した研究で彼が最も関心をもっていたのは過剰生産と恐慌である。（『再生産表式論の研究』29頁，高木彰）

上述の規定(一)は次のように発展させられている。

「その抽象的一般的属性においては人間労働力の支出としては，紡績工の労働は綿花および紡錘の価値に新価値を付け加え，そして紡績過程としてのその具体的な特別な有用的属性においては，これらの生産手段の価値を移転し，かくしてそれらの価値を生産物において保存するのである。。それゆえに，同じ時点における労働の結果の二面性が生ずるのである。」（Ⅰ．261 頁）

この規定(二)は『資本論』の論理枠組を示す。

すなわち，「この点が跳躍点であって，これをめぐって経済学の理解があるのであるから，この点はここでもっと詳細に吟味しなければならない。」（Ⅰ．54 頁）

ここで，貨幣は具体的労働と抽象的労働の両範疇によって措定されたことを想起してもらいたい。『資本論』では具体的労働と抽象的労働によって対象とした社会の歴史的特徴があたえられたのである。

具体的労働と抽象的労働は対象とした社会では次のような現象によって示されているとマルクスは述べている。（同上・Ⅰ 261～262 頁）

すなわち，労働生産性が仮に 6 倍上昇したとして，以前の生産物X量の価値構成を，

X量……Kt ＋ V ＋ M，（K‥資本財，t‥資本財単位当りの価値），

このことは，対象とした現実社会の歴史的特徴づけをこの経済現象から求めようとしていたということであろう。

しかしながら，「一般序説」の方法論に立脚しているかぎり，対象の歴史的特徴は摘出できるであろうが，対象を措定することはできないであろう。「一般序説」が残している課題は，摘出された歴史的特徴の内部に生産一般の措定を位置づけるということである。すなわち二元的な展開の克服ということである。

私は以前，（「価値形態論の形式」『山口大学経済学雑誌』22 の 5・6 号）『経済学批判』においてもこの課題は，はたされていないと指摘した。

だから『直接的生産過程の諸結果』で，マルクスは「この付加的労働は具体的な労働の態容でのみ付加され，それ故にまた特別な使用価値としての特殊な態容でのみ生産手段に付加される。またこの生産手段に含まれた価値も労働手段として具体的労働によって消費されてのみ保存される。」（『資本論綱要』146 頁，向坂訳，岩波文庫）述べている。この点については，この『諸結果』が，『経済学批判』の続きとして書かれたということを想起すれば，『資本論』との相違も了解できる。

V ＋ M ‥直接投下労働時間）

とすると，生産性が上昇した場合のそれは，

6 X量…… 6Kt ＋ V ＋ M,　　となる。

この場合，同一時間量（＝V＋M）の付加で以前は，Kt の価値を保存，移転し，後の場合は，6Kt を保存，移転している。マルクスは，ここに同じ不可分の過程で価値の付加と保存，移転という労働の異った二つの属性がみられるとした。④いうまでもなく，Kt を移転，保存する労働が具体的合目的労働であり，V＋Mを付加する労働が抽象的労働である。

したがって，労働生産性の上昇は，生産手段／具体的労働の上昇で示される。

ただし，マルクスの事例は増大する生産手段の中味は労働対象の増大ということになるが，彼の次の叙述は労働手段の増大による生産手段の増大が引き起こする事柄を示すものである。

「ここで，さらに他の興味ある現象が，われわれの前に現われる。ある機械がたとえば1000ポンド・スターリングに値しそして1000日で磨損し了るものとする。このばあいには，毎日機械の価値の1000分の1が機械そのものからその日々の生産物に移行する。同時に，漸減する生活力をもってであるとはいえ，つねに機械全体が労働過程で作用する。かくして，労働過程のある因子は，ある生産手段は労労過程には全体として入るが価値増殖過程には一部分しか入らない，ということがわかる。ここでは，同一生産過程において，同一生産手段が，労働過程の要素としては全体として算えられ，価値形成の要素としては部分的にのみ算えられることによって労働過程と価値増殖過程との区別がそれらの対象的諸因子に反射するのである。」（同上・Ⅰ・265頁）

彼のいう興味ある現象とは，1日の生産物の価値構成をみると機械の価値は$\frac{1}{1000}$だけであるが，その生産物の生産には残りの価値，$\frac{999}{1000}$によって表示される機械もまた参加しているということである。彼は，これを自然力と同じ様に機械が無償で働いていると解している。（同上・Ⅰ・493頁）これは，

---

④ 労働生産性が一定のままであっても，t が6 t になれば，X量の価値構成は，Kt ＋ V ＋ M，から6Kt ＋ V ＋ M となる。

マルクスは，この場合も価値を保存する労働の属性と価値を付加＝創造する労働の属性との本質的差異を示すとしている。しかし，この場合，Kt であった移転量が 6Kt になったのは，労働とその対象的諸条件の変化によるものではないのであって，労働生産性の変動の場合と同様であるとするわけにはいかないであろう。

また労働手段が手工道具から機械に移行したことによる生産力の飛躍的上昇の説明でもある。

この興味ある現象は生産手段量／具体的労働の上昇が意味するところに位置ずけられなければならない。労働過程の種々の諸要因が生産物価値の形成に演ずる役割で他に彼が述べていることは次のようなこのとである。

「ある労働手段，たとえばある種類の機械が平均してどれだけもつかは経験によって知られている。労働過程におけるその使用価値が6日しかもたないものとしよう。この場合には，それは平均して毎労働日にその使用価値の6分の1を，日々の生産物に移す。……日々の価値移転はこのような仕方で計算されるのである。」（同上・Ⅰ・264頁）

たしかに，使用価値がなくなれば，価値は存在しないという関係は認められるが，この関係によって，価値移転が説明できるわけのものではない。

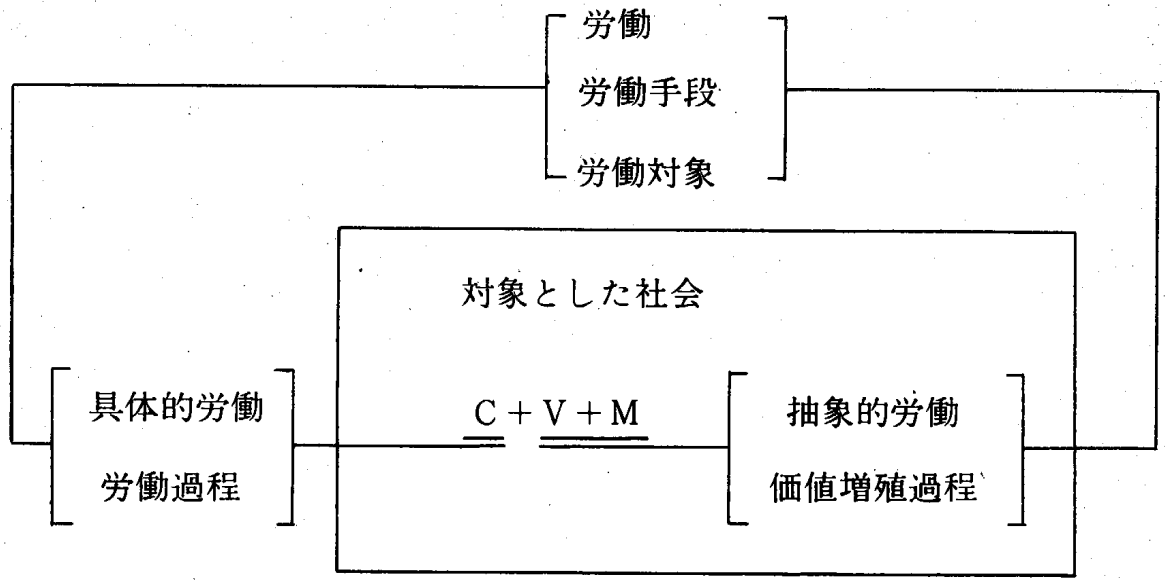
また，引用文にみられるような労働手段の寿命は物的磨損とともに道徳的磨損を受けるのであって，その寿命が6日と決定されるかどうかが問題なのである。

使用価値の形態を価値に関連させて，その使用価値の連続性を説くのは，具体的労働が価値の移転に果たす役割を説くことと同じではない。

前者は一定の価値基準――労働力の価値――を基にして展開される領域であるが，後者は，前者の領域が転倒していることを，すなわち死んだ労働が生きた労働を支配していることを暴露するためにあてられている。

「不変資本」と「可変資本」はこういう二つの領域を内包するものである。

さて，本稿では前稿を基にして，次のような図を得ることができる。



マルクスは対象とした社会の維持と再生の機構をCとVでもって示すとともに、Cを保存・移転する労働で、その社会の限界を示そうとした。

2

マクルスはC（＝不変資本）とV（＝可変資本）から種々のことを明らかにしているが，そのなかで本稿の課題をはたすために適切であると思われる「対象とした社会」の傾向的趨勢の展開から引きだされた結論を取りあげ検討してみることにしよう。

彼は資本蓄積の進展にともなって資本の技術的組成K／T（K：資本財，T(＝V＋M)：直接労働時間）は上昇するものとしている。そしてK／Tによって規定され，その諸変化を反映するかぎりにおいての資本の有機的講成C／Vも上昇するとしている。

彼はCとVの巧みな操作によって「資本主義的蓄積の一般的法則」と「利潤率の傾向的低下の法則」を展開した。

前述したように，CとVは「対象とした社会」を総体的に把握するとともに，その社会の素材変換を説明する役割をあたえられた。後者の役割については，ほとんどの読者が，マルクス「経済学」とは社会の物的代謝＝素材変換を対象とするものであるということから，自明のこととして認めているこ

とである。

そして彼らは，後者の領域から「対象とした社会」の総体把握をめざした。例えば，資本制経済の崩壊を論じたH. グロスマン，安定を論じたツガン．バラノフスキーを私達は知っている。⑤

本稿は「対象とした社会」の総体把握を読みとるためには前者と後者を関連させなければならないことを強調している。この関連において，考察するならば労働の特性があつかわれている「4篇相対的剰余価値の生産」の特に「機械装置と大工業」を取りあげなければならない。

趨勢的結果に関する叙述で多くの解釈者が引用する周知の部分は，「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の節にある部分である。

「生産手段の集中の労働の社会化とは，それらの資本主義的外被と調和しえなくなる一点に到達する。外被は爆破される。」(同上・I・952頁)　ここで述べられている「労働の社会化」とは，資本それ自体が要請する「ますます大規模となる労働過程の協業的形態，科学の意識的技術的応用，土地の計画的利用，共同的にのみ利用されうる労働手段への労働手段の転化，結合された社会的使働の生産手段として使用されることによるあらゆる生産手段の節

---

⑤　資本主義社会の傾向的動きを置塩氏は，CとVによって明瞭に説明している。
そして，次のように結論している。
「生産の有機的構成 ≡ 資本係数は傾向的に増大してゆく場合には，マルクスが示したように利潤率の傾向的低下，失業率の傾向的増大を生ぜざるをえないし，また逆に，傾向的に低下してゆく場合には，資本設備の遊休率の傾向的増大や，搾取率の傾向的低下などが生じざるを得ない。それ故，資本制経済が長期にわたって……存在し，機能しうるためには，生産の有機的構成 ≡ 資本係数が」一定の幅の中に留まればよいということになる。マルクスの理論を後者の領域に徹底させた場合，以上の結論が引き出される。この結論からは，資本主義社会の総体的把握（歴史的特徴）を得ることはできない。この結論は容易に超歴史的なものに還元されるであろう。本稿が，前者の領域を後者の領域に関連させるとしたのは，この置塩論文を参考にすると，生産の有機的構成C／N（N＝V＋M）の動きのなかに生産手段量／具体的労働の動きをとらえ，解釈するということになる。かくして，「対象とした社会」の歴史的特徴を『資本論』のなかに捕捉しようとしたのが本稿の意図である。私達は『要綱』において，このような意図を容易に読みとることができる。〔653～655頁，III〕，詳細な検討は後の機会にゆずることにする。
置塩信雄，「『資本係数』の傾向的運動について，マルクスの所説をめぐって」『広島大学政経論集』22の2号，昭和47年。

約，……」（同上・I・951頁）を下敷としている。

さて，このような展望は「利潤率の傾向的低下の法則」の末尾にもみられる。

「資本主義的生産の三つの主要な事実」として，「(1)，少数の手に生産手段が集積されること。」「(2)，労働自体の社会的労働としての組織。」「(3)，世界市場の形成。」（III・329頁）をあげている。資本主義的蓄積の拡大とともに上昇する有機的構成によって(1)と(3)は説明されている。(3)は，資本の価値増殖欲求にたいする制限の克服として導入される新生産方法による物的生産力の上昇に対応するものとしてあたえられている。そして結果として，また新たな制限とそれはなる。

さて「労働過程」の変容による労働の社会化は，資本の有機的構成で示されるのではなくて技術的構成によって論じられる事柄である。

資本主義の発展とともにK／Tが上昇することはマルクスにとって自明のことである。

K／Tの上昇は，すでに述べたように，具体的労働による労働手段の消費量の増大をも示しており。したがってこれは，人間（＝労働者）の能力の発展を示すことになる。すなわち，「固定資本の発展は一般的社会的知識がどの程度まで直接的生産力となったか，したがって社会的生存過程それ自体がどの程度まで一般的知性の支配下にはいったか……をしめている。」(『経済学批判要綱』III 655頁）しかし，誤解されないために付言すると，機械装置と大工業の労働者にたいする徹頭徹尾，非人間的な仕打ちをマルクスが展開していることを私は無視しているのではない。マルクスは『資本論』の全体でそれを明らかにしている。

資本は「商品に対象化された労働については，極度に節約的にふるまう。これに反して，それは他のいかなる生産様式よりもはるかに甚だしく，人間の，生きた労働の，浪費者であり，肉と血の浪費者であるのみではなく，神経と脳髄との浪費者でもある。」(『資本論』III・108頁）　資本に包摂された機械体系は，人間的搾取材料を拡大するものとともに，搾作度をも拡大するの

である。婦人と子どもを工場へ駆り出し，労働の強度を高める。

しかし，また機械体系はそれ自体が手工道具と異なり科学・技術の論理を実践するという革命性を有するがが故に以下のような側面をももっている。

それは，「労働の転換，機能の流動，労働者の全面的可動性を必至のものとする。」「労働の転換，したがって労働者の能うかぎりの多面性とを，一般的社会的生産法則として承認し，その正常な実現に諸事情を適合させることを生死の問題とする。」「一つの社会的細部機能の担い手たるに過ぎない部分個人に，種々の社会的機能を交互転換的活動様式とする全体的に発達した個人を置き換えることを，一つの生死の問題とする。」（同上 I・613 頁）

機械体系の発展による生産手段量／具体的労働の増大で表現される合目的労働の比重の増大を生死の問題とするという，この一文は，マルクスが「対象とした社会」の出口を模索しているものであると読むことができる。

しかし，機械体系のもとでは，労働者自身は機械装置の意識ある手足として規定されるにすぎないのであって，まさに死んだ労働が生きた労働を支配するのである。

資本主義社会の発展は，マルクスによれば，死んだ労働／生きた労働 $\left(=\frac{C}{V+M}\right)$ の上昇で示されるのである。

それでは，生産手段量／具体的労働が示す産業労働の人間化の必然性とC／V＋Mの上昇というこの相矛盾した関係は，どのように結びついているのであろうか。

それは，窮極現実の人間＝労働者の存在そのものが相矛盾したものとしてあるということであるが，問題としている次元における結びつきの媒介項は，機械体系による生産力の飛躍的上昇が使用価値量を増大させ，それによる物的窮迫性の緩和から社会的必要労働の縮減による労働時間短縮の欲求であるだろうが，『資本論』では明示的な展開はなされていない。

労働時間短縮の欲求は，G—W—G′（＝対象とした社会）が生みだす欲望とは対抗するという意味において，労働者独自の欲求を実現させるための労働時間（＝V＋M）獲得の欲求である。そこで労働時間の短縮が産業労働の

人間化を必然的にする論理とは労働者の共同性を形成する論理といえる。

さらに付言すると，産業労働の人間化に関する叙述分析によってそれは裏打ちされているのではない。[6] それは，マルクスの人間観の産業社会における展望である。したがって，労働者の共同性を形成する論理は，『資本論』が彼の人間観の論理化であったように，彼の人間観を深めることによってさらに発展させられなければならない。

3

マルクスの理論を参考にして独特な理論展開をされている宇野氏の労働の二重性に関する部分を検討してみよう。

まず，労働の二重性は次のような背景に位置づけられる。

「(A)，一般的な労働＝生産過程が資本の形態の下にも行われることが明らかにされなければ，資本は資本主義として歴史的なる一社会を支配するものとはいえない。(B)しかも商品形態に単純化され，あらゆる他の外被をはがれた資本主義社会において始めてかくの如き一般的な労働＝生産過程が明らかにされ得るのである。」(『経済原論』上89頁　宇野弘蔵，A，B，は引用者)

(A)と(B)で氏が展開しようとしていることは，「対象とした社会」の歴史的特徴づけなのである。そこで，まずあらゆる社会形態の下に共通に行われるものとしての労働＝生産過程を氏は考察されていく。

氏の理論を解釈するためには，(A)と(B)の関係が意味するものはどのようなものであるのかをおさえることが肝要である。それは氏の展開を跡ずける過程で指摘しよう。

---

⑥　マルクスは，産業労働の人間化に関する叙述に註を付して，ジョン・ベラーズを引用している。「『労働は生命のランプに油を与え，思考はそれに火を点ずる。……子供じみた愚かな仕事は子供の精神を愚かなままに放置する。』」いうまでもなく，これは，マルクスの人間（＝労働）観と共通している。マルクスは「ジョン・ベラーズは，社会の両極における肥大と委縮とを，相反する方向においてではあるが，産み出す今日の教育と分業との必然的廃止をすでに17世紀末にきわめて明瞭に認めていた。」と述べている。（『資本論』Ⅰ，615頁，向坂訳）

労働過程は人間の自然への働きかけという主体的側面が説かれているのにたいして，生産過程はその主体的行為の結果として生じた生産物の視点から考察されると氏は述べておられる。⑦（同上，92頁）そして，歴史的特徴づけは，この生産過程で説かれた労働の二重性が基本線となる。

「(C)，例えば10斤の棉花と1台の紡績機械とをもって（もちろん，簡単にするために一切の生産手段をこの二つで代表させるのであるが）6時間の労働によって10斤の綿糸が生産されるとすると，10斤の綿糸は6時間の紡績労働の結果に外ならない。棉花や機械がそれ自身で綿糸になったわけではない。いい換えると労働は能動的役割を演じ，生産手段は単に受動的役割を演ずるにすぎない。しかし，この10斤の綿糸は単に人間の労働6時間の生産物とはいえない。綿糸の生産に生産手段として役立つ棉花，機械の生産にも労働を要している。仮に10斤の棉花に20時間の労働を要し，機械の生産にも幾時間かを要するものとして，この紡績労働過程中に消化される部分が4時間分の労働生産に相当するとすれば，生産手段自身にすでに24時間の労働を必要としていることになる。そこで綿糸10斤は，単に6時間の労働の生産物ではなく，24時間の過去の労働に6時間の紡績労働を加えた30時間の労働生産物である。」（同上，93頁，Cは引用者）

この叙述は，生産過程に関する部分の叙述であるが，いかなる点において，あらゆる形態の生産過程に共通の規定として解されるだろうか。綿糸10斤が30時間の労働生産物であること，そして30時間の内訳があたえられているのであるが，――氏はある物を生産するには時間を要するということを主張され，それを共通の規定であるとされているのであろうか。後述するように，具体的労働と抽象的労働を共通の規定の内実として示されているところから判断すると，時間を要する，ということだけではないようである。――

このような分析が可能であるということは，(B)で述べられているように資本主義社会を背景にしてのことであるだろう。

---

⑦　桜井毅氏の「労働過程」と「生産過程」の関係，についての質問に，宇野先生は「労働過程は」は「生産過程」の前提なんだと幾度も強調されている。最後に，桜井氏の「労働過程」から説かないと，「労働の二重性」は説けないのか，「生産過程」からでは「労働の二重性」は説けないのですね，という質問に，先生は明解に答えられない。（『資本論研究』II，227頁）

宇野氏が，「労働過程」は「生産過程」の前提であると強調されても，「生産過程」以後の展開に，「労働過程」の要点である労働の特性が――「つまり人間が自然に対してはたらきかけるときに，労働というのが他の生物と違うのだという点」（同上，226頁）――その位置をあたえられていないということから，「労働過程」は氏の展開にとっては必要ではないようにおもえる。

このことは，抽象的人間労働を前提にしなければ綿糸10斤に30時間を要するということが導出されないという点に示されるだろう。

しかしながら氏は，抽象的労働の規定(C)の叙述から引き出している。

すなわち，(C)に続いて

「この紡績過程で行われる労働は，かくして二重の性質を持っている。もちろん，労働する者が二度労働するのではないが，同じ労働が二面をもって作用する。すふなわち一面では棉花を綿糸に生産する具体的なマルクスのいわゆる有用労働としてであり，他面では24時間の労働生産物たる生産手段に，新たに6時間の労働を加え，10斤の綿糸の生産に必要な労働30時間の一部を構成するものとしてである。後者は前者の具体的有用労働に対して抽象的人間労働ということが出来る。というのはこの面では紡績労働も単に人間労働力の支出として，その時間継続によって量的に果るにすぎず，棉花の栽培，機械の製作にあたって支出される労働力による労働と同じ質のものとして計量せられるからである。」(同上，93頁)

具体的労働の規定についてであるが実際，製鉄労働によって綿糸を作ることはできないので，この説明は誤りではないが，これだけの意味しかもたされていないのであるなら，それに基づいた，なんら積極的な展開を含むものではないであろう。

マルクスにあっては，労働の合目的的性に主眼があり，したがってそれは結果としての生産物の視点から考察されるというよりも，労働という過程が内包しているところのものに注意が向けられていたと，私は解している。もちろん，氏にマルクスの規定を押しつけて批判するつもりはない。

しかし，氏の労働＝生産過程と表現している労働過程に関する叙述(同上，91頁)はマルクスのそれの要約と解釈しても誤りではないようにおもえる。ただ氏の場合は氏の論理展開に労働過程はその位置をあたえられていないという点がマルクスと対照をなしている。

氏は続けて，具体的労働は「労働の生産力の増進」あるいは，「機械のような労働手段は10斤の綿糸の生産過程では，全体として機能しはするが，綿糸の生産に必要な労働としては機械の消耗に応じて計量せられる。」(同上，94頁)等々のときに示されると述べている。

氏は「かくのごとく」これまで述べてきた労働の二面は「あらゆる形態の生産過程に当然のことである」(同上，95頁)と主張されるのであるが，私に

はよく理解できない。

氏が具体的労働について述べられていることは，抽象的労働の規定が対としてあたえられていないと意味をなさないということに留意しておいて，さらに氏の展開をみていくことにする。

さて，抽象的労働があたえられるためには当然，次のことが問題となる。「それぞれの使用価値の生産に必要な労働という場合には，いずれも一定の平均した労働力の支出をもって計量する外はない。」（同上，95頁）から，抽象的人間労働への還元の問題が生じる。

氏は，この還元は「あらゆる社会形態に一様の方式で行われるものではない。」（同上，95頁）と述べられる。かくして，(A)から，氏の「対象とした社会（＝資本主義社会）」の歴史的特徴づけは，この還元の機構ということになる。だから，資本主義社会では，全ての労働生産物が労働力の価値に還元可能となるのは，労働力の商品化によってであるから，この社会の歴史的特徴を労働力の商品化と，氏は表現されるのであろう。

しかし，氏のいう労働力の商品化（＝資本主義）によって，はたして私達は一般的抽象労働を認識し得るだろうか，――「資本主義はかかる抽象化の物質的基礎を与えるのである。」（同上，96頁）――

(B)で述べられる「一般的な労働＝生産過程」の内容は一般的抽象労働が前提されていた。そして，(A)と(B)の関係は，(A)の措定には(B)を要し，(B)の措定には(A)を要するというものであった。これは，結局，労働力の商品化と一般的抽象労働の関係を示すものとなる。私はこのような関係で歴史的特徴づけが推定できるのかどうか，明確な解釈をすることはできないが，疑問におもう。抽象的労働への還元機構は氏も述べているように各形態の社会では異るのであるから，それは結局，抽象的労働を各形態で規定するということになる。とすると抽象的労働は共通規定ではなくなるということになるのではないか。最後に，外在的であるが疑問点をただしておきたい。

労働力の商品化，すなわち全ての生産物が労働力の価値によって表現され得るためには，資本家と労働者との間に交換関係が普段に継続しなければな

らない。

このためには，たとえ飢餓線上とおもわれるあたりに労働力の再生産費が決定されていても当然のこととして受け入れる態度，例えば，労賃の低いのは，自己の能力が劣っているからであるとするような態度が形成されていることが必要である。――マルクスはこれを貨幣の措定によってあたえたのであるが――

このような態度が氏の共通の生産過程の規定と氏の労働力商品化によって措定されるだろうか。氏はおそらく、それは商品のところで論ぜられたと主張されるだろう。

問題は次の点に生ずる。

このような態度が歴史的限界をもつことが明示されなければならない。

対象とした社会の歴史的特徴づけとは，その歴史的限界を明らかにすることである。

氏の(A)と(B)を基礎にした展開からこれが可能であろうか。

労働の結果としての生産物の視点からは，過去の社会は裁断できるであろうが，当の国家独占資本主義と呼ばれている社会（＝対象とした社会）の歴史的限界をマルクスの方法によってとらえるためには，労働そのものの内に歴史的限界を求めなければならないのである。